七転八起。色々なことにチャレンジしよう！

地域社会の固有性を理解する

私の専門は、都市社会学、観光社会学ですので、その立場から、①地域社会の固有性、②地域社会にとっての観光、の二つをテーマに研究を進めてきました。

町の個性は、町並み、街路などのハード、人々の日常生活やお祭り、地域活動、まちづくりなどのソフトの両面から生み出されています。私はこれらと共にある人々の営みや想いに惹かれ、それぞれについての社会学的な研究を目指すようになりました。

対象領域も広いので未だ研究途上ですが、幸い、魅力的な個性を有する町に出会うことができました。それが、東京都の「谷中・根津・千駄木」（谷根千）地区と、群馬県の桐生市です。私は両地域にお世話になりながら、町並みの保存・活用の実態、祭礼行事、まちづくりの取り組みなどに関する事例研究を進めてきました。このような研究を積み重ね、地域社会の固有性について様々な観点から考察し、理解することが第一の課題です。

地域社会にとっての観光というテーマ

これからの地域社会を考える上で、観光というのは重要な方向性の一つですので、現在の観光現象を正しく理解することは欠かせません。ただし、どのような観光形態が当該地域に適合的なのか、そもそも観光が最適解なのかどうか、ということはその地域社会のあり様を踏まえて考えていく必要があります。そのためにも、まずは地域社会の固有性の理解が求められるのです。

観光現象は多様な側面を含んでいますが、その中でも特に、近年の新たな観光行動の発生に興味を持っています。地域社会にとっての観光を考える上で、大規模な投資が必要な観光形態はあまり現実的ではありません。むしろ、小規模であっても、その地域にしかない独自の歴史や文化、町並みなどを経験、消費することを望むような新たな観光潮流に、今後の可能性の芽があると思います。そのため、このような新たな観光潮流の特性の解明を第二の課題として研究を進めています。

石井 清輝
研究室

専門分野

観光社会学、都市社会学

担当科目

観光社会学、都市社会学
社会調査（質的調査）

ゼミの活動内容

ゼミでは私自身の研究対象地でもある群馬県桐生市、「谷根千」地区を主なフィールドとして、特に地区で開催されている祭礼行事の継承、活性化と、地域に残る歴史的な建築物、町並みの保存、活用をテーマに、各種の調査活動や地域イベントの企画などを進めてきました。実際には、関連する領域の知見を文献で学びつつ、現場での活動に従事し、その経験を持ち帰り、改めて関連領域、現場についての議論を深めていく、という作業を行っていきます。各自の関心に即して、地域社会やまちづくり、観光現象について、社会学的に分析、理解できるようになることがゼミの目標です。

井手 拓郎
研究室

専門分野

観光学、政策学、観光まちづくり、リーダー発達論、リーダーシップ論

担当科目

観光まちづくり論、観光産業論、観光地域調査演習、基礎演習、演習Ⅰ、演習Ⅱ

ゼミの活動内容

ゼミナールでは、論理的思考力や問題解決力、ひいては「自ら考えて行動する力」を高めます。進行は、テキスト輪読や討論、研究発表を基本とします。各学年での学びの概要は以下の通りです。

①2年次後期：3年次以降の演習に必要な基礎的スキルを習得します。具体的には、論文・レポートの書き方とビジネスマナーの習得に取り組みます。

②3年次：習得してきたスキルを土台に、前期はグループ研究の計画立案です。夏休みに各グループで社会調査を行い、後期の前半にその結果をまとめて論文集に仕上げます。後期の後半は、各自で研究テーマを検討し、卒業論文の研究計画書を作成します。

③4年次：前期は、各自の研究計画の磨き上げと調査計画の立案です。そして、夏休みに各自で社会調査を実施します。後期は、データ分析及び研究進捗報告・討論を繰り返し、卒業論文を完成させます。論文執筆を通して大学での学びをブラッシュアップし、卒業後の活躍につなげます。

単純なことは複雑に、複雑なことは単純に

観光まちづくりにおけるリーダーシップ

私の専門である「観光学」は観光に関する事象をさまざまなアプローチによって捉える学際的学問で、私がおもに用いるアプローチは経営学や心理学です。これらのアプローチを用いて近年は、「観光まちづくりにおけるリーダーの発達及びリーダーシップ」について研究してきました。

日本では最近、観光まちづくりがさまざまな地域で進められています。このまちづくりには必ずと言って良いほど、リーダーの存在があります。彼らはどのように観光まちづくりのリーダーとなったのか、彼らが発揮するリーダーシップとはどのようなものか、それはどのような成果をあげるのか、にとても興味があります。これまではリーダーの視点から研究を進めてきましたが、近年はフォロワー、すなわちリーダーシップの影響を受ける人々の視点から「観光まちづくりにおけるリーダーシップ」を研究しています。また、リーダー以外が発揮するリーダーシップについても研究していきたいと考えています。

道後温泉調査（ゼミナール活動）

グループ研究論文執筆（ゼミナール活動）

研究する上で大切にしていること

私は「その研究の社会的意義は何か」ということを大切にしています。研究という行為自体に、「探求」という面白さがあります。しかしそれだけにとどまらず、社会的意義という観点を大切にして研究を進め、その成果を少しでもまとめることができると、社会への貢献という形で研究の意味をより拡大させることができます。

一方で、「現場ですぐに活用可能かどうか」という観点のみで研究価値を判断しないようにすることも心がけています。すぐに実践に役立てられるかということのみを追い求めてしまうと、問題の根本を熟慮せずに実践を促してしまう可能性があります。それでは結局その問題を根本的には解決できず、より良い状態、観光まちづくりで言えば「住んでよし、訪れてよし」を実現できないかもしれません。

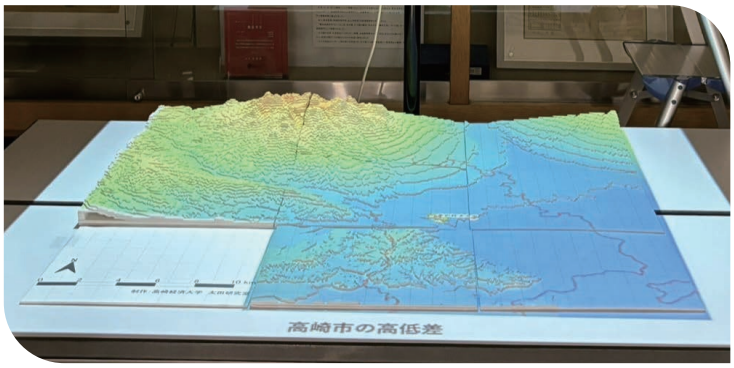
研究の先にどのような意味を社会にもたらすことができるのか、を大切にしながらも、拙速に結論を出してしまわないよう地道に研究へ取り組むことも大切にしたいと思います。

かだる雪まつり（教員の研究&実践活動）

研究に、サークルに、大学生活を思いきり満喫しましょう。

観光による地域の変化を考える

私はこれまで大都市圏の沿岸地域をフィールドに研究を進めてきました。特に、東京湾の沿岸地域は、2021年夏に開催された東京オリンピックやパラリンピックをきっかけとして新たな観光スポットとして再編され、再び注目を集める地域となっています。私は地図を片手に現地を歩き、フィールドワークによってこれらの地域における観光空間の形成過程や地域変化にともなう諸課題について考えています。また、最近は大都市圏から地理的に離れた地域が観光によってどのように変化するかについても研究しています。たとえば、沖縄県の先島諸島に位置する石垣島や宮古島では、国内外の観光需要の高まりによって観光客数が急増しています。こうした沖縄県の離島における近年の状況は、観光業に従事する従業者数の増加や他県からの移住者の増加による地域の活性化という正の影響もみられます。しかし、観光客が殺到することによる渋滞の発生、飲食店の不足、医療機関の不足、海の環境の悪化などの島にもともと住んでいた住民の生活や自然環境に対する負の影響も大きくなります。観光地理学では地域の変化をとらえることで、その要因や地域が抱える問題を明らかにして解決策を考えることも重要です。



GISを活用して作成したプロジェクションマッピング

地図で可視化する

さらに、近年はコンピューターの進歩やオープンデータをはじめとした統計情報の充実などによって、GISを活用した地域分析が可能な環境が整っています。私はこれらの統計データやフィールドワークで得られたオリジナルのデータを地図を描くことによって可視化し、わかりやすく伝えることを目指しています。地図によって地域の魅力や課題を共有し、研究成果を発信していくことも重要な研究テーマです。

浅草巡検

プロジェクションマッピングの展示

太田 慧
研究室

専門分野 地理学、観光地理学、GIS（地理情報システム）

担当科目 地理学、観光地理学、地理情報システム論、基礎演習、演習Ⅰ、演習Ⅱ

ゼミの活動内容

2年生ゼミでは、地図を活用しながら地域のさまざまな魅力や課題について考えるとともに、人文地理学の中でゼミ生自身が関心のあるテーマをみつけ、深めていくことを目指します。このためにはまず、観光地理学などの人文地理学に関連する様々な文献を購読し、自身が関心のあるテーマに触れることが重要になってきます。2年生のゼミでの活動は、様々なテーマに触れるために文献の輪読を行います。輪読では、毎週担当の受講者に文献の内容を発表してもらい、発表終了後にはゼミの出席者全員で発表内容について議論していきます。また、観光地の成り立ちや課題をゼミで共有するためには、地域を実際に歩いて、みて、聞いてみることで、現地の空気を感じ取ることが大切です。2年生のゼミでは、観光地などがどのように成立したのかを、テーマを決めて見学する「巡検」プランを計画してもらい、実際に現地を歩きながら地域の課題を考えます。

さらに、3年生では実際に手を動かし、グループ作業を通して地域の課題や魅力を探ることを目指しています。近年は地形模型を作成し、そこにGIS（地理情報システム）で作成したさまざまな地図をプロジェクターで投影する「地域プロジェクションマッピング」を作成しています。4年生のゼミ活動では、これまでの学びの総仕上げとして自分で課題を設定し、卒業論文を仕上げます。

小熊 仁
研究室

専門分野

交通政策論、公益企業論

担当科目

交通政策論、観光交通論、流通経済論、演習

ゼミの活動内容

ゼミナールでは、主に交通分野を研究領域とし、フィールドワーク、基本文献の整理、調査分析など様々な作業を通して、ゼミ生１人１人が自分自身で調査研究できる力を養成することを目標に活動を行います。はじめに、2 年次基礎演習ではゼミ生の関心に応じて 3 ～ 4 つ程度のグループを作り、グループ研究のテーマを決め、そのテーマに沿ったフィールドワーク先を決定してもらいます。そして、フィールドワークを行うための準備として文献整理や調査先の下調べを行ってもらい、冬季休業期間中にグループでフィールドワークを行ってもらいます。3 年次はフィールドワークの結果をもとに秋から冬に開催される各種ゼミナール大会や懸賞論文の応募に向け、論文の執筆や報告資料の作成を行います。それ以降は卒論の執筆準備に取り掛かります。
ゼミは学生の自主性を尊重し、「全力で勉強し、全力で遊ぶ」をモットーに明るく活発なゼミにしたいと考えています。また、他大学との交流や関連施設の見学、ゲストスピーカーの講義も企画し、これらを通して様々な見識を身に付けて頂きたいと思います。交通分野（例えば LCC、空港、クルーズ船、港湾、高速ツアーバスなど）に興味を持つ学生はもちろん、観光関連産業や地域活性化などの分野に関心がある学生、これから勉強したいと思っている学生、誰でも歓迎です。

**学生生活は一生に一度です。
色々経験して沢山学んでください。**

道の駅の採算性と効率性に関する研究

私の専門の研究領域は交通政策論・公益企業論であり、主に大きく 3 つのテーマを中心に研究しています。1 つは道の駅の採算性と効率性に関する研究です。現在、全国には 1193 件に上る道の駅が全国に設置されており、道路交通情報の提供はもちろん、観光、防災、教育、医療など地域のあらゆるニーズを支える拠点として大きな役割を果たしています。しかし、近年は施設の老朽化に伴う修繕維持費の高騰や駅間競合により業績が伸び悩む駅もあり、運営の見通しが立たず廃止に至った駅も存在します。道の駅の維持にあたっては公共性と効率性の両立が求められますが、これを実現するためにはどのような施策が望ましいのかについて定量的・定性的な調査をもとに分析を行っています。

条件不利地域の公共交通と交通インフラの非経済的便益の評価に関する研究

2 つ目は、条件不利地域の公共交通とそれを支える空港、港湾、駅などの交通インフラをめぐる非経済的便益とその価値構成の評価に関わる研究です。周知のように少子高齢化の進展に伴い、過疎地域や離島をはじめとする条件不利地域の公共交通の経営は厳しさを増しております。しかし、これらの交通は不採算ではあるものの、住民の移動や地域の物流において不可欠な存在であり、これらの存在により通常の市場取引では顕在化しない「非市場的な便益」が発生します。ここでは沖縄離島の航空輸送を対象にこうした非市場的な価値を定量的に計測し、利用者や住民が航空輸送に抱く価値とその背後にある意識構造を定量的に解明することを目的に研究を行っています。

公共交通の住民参加とソーシャルキャピタルの関係をめぐる研究

最後は、公共交通の住民参加とソーシャルキャピタルの関係に関わる研究です。先に述べましたように条件不利地域の公共交通は苦しい経営を余儀なくされていますが、そのような地域の一部では住民が公共交通の企画・運営に参加する住民参加型の公共交通の運行が開始されています。一方、このような住民の取り組みの原動力になるものとは何か。ここでは、ソーシャルキャピタルの存在に焦点をあて、ソーシャルキャピタルの醸成が公共交通の住民参加に結びつくのか否かについて理論的・実証的に明らかにすることを目的に研究を行っています。

夏季企業研修（ANA 羽田整備工場 :2019 年度）

就職活動体験報告会（2020 年度）

問いと向き合う。学びの旅へ

社会をデザインする

私の研究テーマは「社会デザイン学」です。これは、社会の深層を規定する象徴構造を「デザイン」と捉え、その構造を分析・考察するとともに、現実社会にパラダイムの転換を促し、新たな規範や行動様式を追求する学問です。その意味で、社会デザイン学は最も実学に近い領域であると考えています。

研究を進める上で大切にしているのは、たとえ「◎◎の研究」であっても、それを「◎◎は○○である」と主語として定義するのではなく、「○○の営みこそ、◎◎を体現している」といった述語として捉えることです。言葉によって定義すると、対象が本来内包する具体的な本質や微妙な位置づけを見失う恐れがあるからです。一方で、述語として考察することで、地域の人々の営みがいかに主体的に地域資源を創出・継承し、未来へとつなげているか、さらには地域ダイナミズムの息吹までも実感することが可能になります。

地域に根ざす研究のまなざし

研究者としては、研究の動機を大切にしながら、日々考察を重ねています。学会などで求められる先端的な課題の解決よりも、地域や社会からの要請に応える研究を、優先すべき課題と位置づけています。

特に「持続可能な地域づくり」に資する思考の補助線の解明に関心を寄せています。こんにち、人口減少や過疎高齢化、教育格差、ジェンダーなど、社会は大きく変容しつつあり、各分野でパラダイムの転換が求められ、その萌芽ともいえる試みが始まっています。

このような時代において、「人の営み」と「社会の見取り図」の関係について考察を深めています。地域社会における様々な課題や、当たり前とされてきた事象をデザインの視点から捉え、理論と実践の両面から研究を進めています。

デザイン思考を育む

デザイン思考とは、静的な思考にとどまらず、行動様式を追求する動的な営みであると考えます。まず、「社会の側から環境デザインを考える」ことを重視しています。社会の象徴構造を通じて、現実社会の価値観転換を促し、新たな規範や行動様式を追求することが目的です。「対話から環境デザインを捉える」姿勢を大切にし、学生の創意工夫や考えを尊重しながら利他的・創造的・共生的に活用する方策を対話的に見出していきます。そして、「つながりの中からデザインする」ことを通じて、学生が問いを立て、自己諒解や他者諒解を深めることを目指しています。

イフガオ棚田の前で

ゼミ写真

フィリピン共和国国立イフガオ大学

嘉瀬井 恵子
研究室

専門分野

社会デザイン

担当科目

環境デザイン、地域振興論、初年次ゼミ、グループ研究I、基礎演習

ゼミの活動内容

ゼミナールでは、「問いを立てること」と「問いと向き合うこと」を大切にしています。社会や地域課題に向き合うだけでなく、自分自身と向き合う姿勢も育みます。初回講義では、「ゼミ参加の心得」を全員で話し合い、各自が「学びのマイルストーン」を設定します。学生は常に、自分のマイルストーンがどこにあるのかを確認しながら、主体的にゼミ活動を進めていきます。時に立ち止まり、悩むこともあるかもしれませんが、自問自答を重ね、思考のプロセスを楽しみながら、乗り越えていってほしいと願っています。

なお、2025 年度の 2 年次基礎演習では、「本との偶然性出会い」をテーマに、グループワークを通じて学びを深めています。

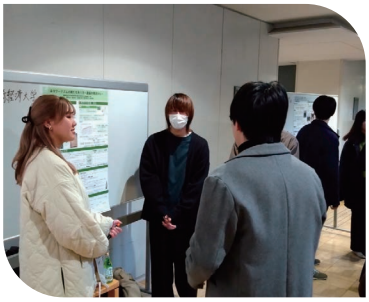
学びを通じ、社会を広く、多元的にみる力を

私が取り組む研究では、農業・農村における営農活動と、そこから派生する教育・福祉的活動、観光振興活動などに焦点をあてて、各地の調査を行ってきました。以下では、近年の主な研究テーマについて紹介します。

世界 / 日本農業遺産登録を通じた地域農業経営

2000 年代以降、世界 / 日本農業遺産（FAO/ 農林水産省）、重要文化的景観（文化庁）など、農村景観、農村文化、農業技術を後世に残す保護制度が誕生しています。地域農業の担い手が早晩不在となるなかで、これらの制度を活用して国土保全とともに農業・農村の歴史的・文化的価値を活用した地域観光の展開と、持続的な地域農業システムの再編が求められています。

現在取り組む研究では、世界 / 日本農業遺産等の国内認定地域を対象に、持続的な地域農業マネジメントシステムの形成要因の解明を行い、農業経営と「農業遺産」保全が両立した地域農業のあり方を提示することを目的に、各地の事例調査を実施しています。



学校給食における地産地消と食育

学校給食での食材供給は戦後整備されましたが、大規模調理場の建設や、大口の食材供給経路の形成により、地域で農業生産が行われているにも関わらず、その利用が乏しい状況がありました。各地域の実践や政策進展により、現在は 47 都道府県、いずれの学校給食においても程度の違いはありますが、地場産農産物が導入されています。そして食材としてだけではなく、生産者らによる指導も含めて教育素材としても活用する状況がみられています。

一方で、現在では教育政策、農業政策の一環で展開されている学校給食における地産地消ではありますが、その安定的な生産や供給体制、いかに教育活用できるかなど課題が残っています。学校給食の今昔の状況を踏まえながら、その推移や今後の展望を研究しています。

片岡 美喜
研究室

専門分野

農業経営学、農業・農村における観光・交流活動による地域振興、農業・農村における社会貢献型事業論

担当科目

観光資源論、地産地消と現代の食・農、エコツーリズム論、エコツーリズム・グリーンツーリズム特論（大学院講義）

ゼミの活動内容

本ゼミでは、農業・農村など地域資源を生かした観光振興および地域振興に関する学習・研究を行っています。

演習 I では、各自が予習を行ったうえで、定められた課程に従ってディスカッションを行う協同学習の手法である「LTD 学習法」を実施しています。この方法は、専門文献の学習に際して、輪読よりも学生の自主性と理解度を高めるものとなっています。

3 年生のグループ研究では、現地調査を実施し、他大学との交流ゼミ合宿を行います。研究成果は、全国エコツーリズム学生シンポジウムなど学外での発表機会があります。

演習 II では、卒業論文に関する研究と論文執筆を行います。地域観光・農業・環境・食など、各自の課題意識に基づいたテーマをもとにした調査・研究をしています。

木暮 律子 研究室

専門分野

日本語教育学、留学生教育

担当科目

大学生活のための日本語、
専門聴解、ビジネス日本語Ⅰ、
多文化共生論、
異文化コミュニケーション

学生へのメッセージ

私は、外国人と日本人のコミュニケーションを分析し、そこで生じる問題や日本人の言語行動、日本語会話の特徴について研究しています。ゼミの担当はありませんが、留学生向けの日本語科目のほか、「多文化共生論」や「異文化コミュニケーション」の授業を担当しています。これらの授業では、多様な価値観を尊重し、他者との協働に必要なコミュニケーション能力を身につけることを目指しています。

多文化共生に向けた地域づくりについて、皆さんとともに考え、実践していけることを楽しみにしています。文化や言語に関心がある人、コミュニケーションスキルを向上させたい人は、ぜひ受講してみてください。

自分にできることを考えよう！

多文化共生社会を目指して

現在、日本には300万人以上の外国籍の人々が暮らしており、日常生活のなかで外国人と接することも増えてきました。少子高齢化による労働人口の減少や世界的な留学生獲得競争のもと、日本における外国人住民は今後ますます増加していくことが予想されます。

自分が生まれ育った文化から離れて、まったく違う言語が使われている国で生活することは大変な苦労が伴います。しかし、私たちのまわりにいる外国人は、必ずしも日本語を学ぶ機会に恵まれているわけではありません。経済的な理由や仕事の都合から、日本語を学びたくても学べない人がいます。そのような人たちが、言葉ができなければ何もできないと諦めることなく、安心して日本で生活するためには、わからないことがあっても気軽に助けを求められる環境や、悩みを聞いてくれる身近な日本人の存在が欠かせません。言語や文化の違いに関わらず、誰もが安心して暮らせる社会を築いていくためには、私たち一人一人が自分にできることを考え、外国籍の人々を「住民」として受け入れていくための環境づくりが必要なのです。

外国人とのコミュニケーション

日本社会の多言語・多文化化が進むなか、外国人にもわかりやすい日本語の伝え方が注目されています。外国人とのコミュニケーションを成功させるためには、私たちが普段どのように人とかかわっているのか振り返り、日本語を母語としない人の視点に立って客観的に日本語を捉えることが重要です。外国人にとってわかりやすい日本語とはどういうものか、外国人とのコミュニケーションを通して我々日本人も学んでいく必要があるのです。

授業を通した学びと実践

授業では、日本人学生と留学生が交流しながら学び合い、体験を通して理解することを心掛けています。また、学んだ知識を実生活でも活かせるように、実践的なトレーニングを取り入れ、学生同士が協力して課題に取り組めるよう工夫しています。

例えば、「多文化共生論」の授業では、言葉がわからない国で震災に遭ったらどのような状況に置かれるのか、シミュレーションを通して学びます。言葉がわからないことで生じる不安な気持ちを体験し、留学生の経験を聞くことで、外国人が災害弱者にならないためのまちづくりを考えていきます。また、「異文化コミュニケーション」の授業では、日本人学生と留学生が協力して、外国人住民に向けた新聞記事やポスターを作成し、日本語弱者の立場に立った「やさしい日本語」を身につけていきます。

皆さんには、このような活動を通して価値観の異なる多くの人と出会い、多文化社会において自分を表現することのできるコミュニケーション能力を身につけてほしいと考えています。

常にアンテナを張って、探求心を養おう！

言語への興味

子どもの頃から言語に関心があり、当時 NHK で放映されていた様々な語学講座（フランス語、ドイツ語、スペイン語、中国語など）をよく見ていました。それぞれの言語はどんな風に聞こえるのか、どんな文の仕組みをしているのかに大変興味がありました。そこで、大学では迷わず言語学を専攻し、大学院はカナダではフランス語、アメリカでは言語学の中でも特に統語論（文がどのような構造で成り立っているかを研究する言語学の一分野）を専攻しました。

最近の研究テーマ

近年、世界的に第三言語習得（Third Language Acquisition、TLA）への関心が増大しています。特にヨーロッパでは、複数言語を学習し使用する機会が多い環境から、TLA 研究が盛んに行われています。すでに第二言語（L2）を学んだ学習者が第三言語（L3）、あるいはそれ以上の言語を習得するプロセスを研究対象とします。例えば日本ではほぼ大部分の日本語話者が L2 として英語を学んでいますが、L2 の英語能力が L3 習得の成功を予測する要因となり得るかを探求します。第二言語習得研究（Second Language Acquisition、SLA）では個人差要因としてすでに習得している母語（L1）の知識が、L2 のインプットを理解するのに役立つという見解に立ちます。そこで、L2 習得の体験が L3 習得にどのような影響を及ぼすのか、すなわち L3 習得を活性化するのか、あるいは抑制するのか、また L2 能力のレベルによって L3 習得がどう異なるのか等を具体的に検討し分析します。

自身の言語習得

私自身は、L2 が英語、L3 がフランス語、L4 として現在韓国語を学んでいますが、L4 の習得過程を自己分析しています。言語類型学的に見ると、英語とフランス語はどちらも同じインドヨーロッパ語族に属し、特に英語にはフランス語から入った語彙も多いので、当然ながら L2 の英語の知識は L3 のフランス語の習得に大変プラスになったと思います。一方、L 4 の韓国語の習得では、日本語と韓国語は同じ語族に分類されてはいませんが、語順および語彙の面で類似点が多いので、L1 の日本語の知識をかなり活用しています。

しかし、驚くべき体験もありました。昨年、L4 の韓国語を始めたばかりの頃、会話のクラスで言葉が出てこないとき、L1 の日本語でも、L2 の英語でもなく、なんと L3 のフランス語の単語がしばしば飛び出てきたのです。これは、とても意外で不思議な感覚でした。同僚の TLA の研究者によると、実はこのような現象は珍しくなく、L1 と L2 が安定している場合、不安定な L3 と L 4 がお互いに介入や競合することがあるそうです。今後、L4 の習得が進むにつれて、この現象がどう変化していくか、自身の習得過程を興味深く観察していきたいと思っています。

関口 智子
研究室

専門分野

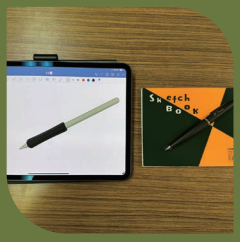
言語学（統語論）、第二言語習得、通訳翻訳研究

担当科目

General English I, II
Business English I, II, III, IV,
World Issues I, II

学生へのメッセージ

「アンテナを張る」とは、周囲の情報や状況を注意深く感じ取ることを指します。具体的には、感度を高めて情報を収集したり、注意を向けて状況を把握することです。これは教育やビジネスの世界でも重要で、最新のトレンドやニーズを素早くキャッチすれば、学習や業務に生かすことができます。私の担当する英語選択科目 World Issues I, II では、毎回世界の最新の時事問題をトピックとして扱います。英語の生のニュースを素材に、語彙力、リーディング力、リスニング力を向上させるだけでなく、世界情勢をリアルタイムで日本語と英語で学んでいきます。世界で何が起こっているのか、時事問題に関心のある学生さんは、ぜひ受講してみてください。



田中 宏和
研究室

専門分野

スポーツ政策学、
スポーツ行政学

担当科目

スポーツ政策論、スポーツ科学、
基礎演習、演習Ⅰ、演習Ⅱ

ゼミの活動内容

スポーツは、社会の様々な分野に影響を与え、様々な分野から影響を受けながら存在しています。

そこでゼミナールでは、スポーツのみならず現代社会の諸問題に関連した書籍を読み、様々な視点から理論的に理解するのと同時に、議論を通して理解を深めていきます。

そしてそれを踏まえ私たちは、スポーツにどのようにかかわれば、スポーツの価値や意味をどのように理解すれば、様々な現代社会の諸問題を解決することができるのかについて考えていきます。

また学外イベントに積極的に参加し、様々な価値観や見識を身につけていきます。

このような活動を通して最終的に自分が、興味関心を持ったテーマについて卒業論文として纏めていきます。卒業論文は、学校教育の集大成となるものです。しっかりと取り組んでほしいと思いっております。

スポーツが好きだからこそ、疑ってみよう！

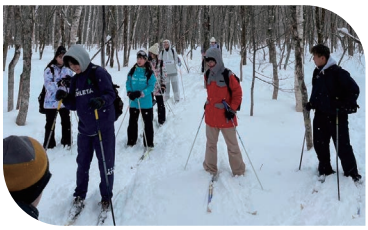
多様化するスポーツ

今日のわが国の政治、経済、社会状況はめまぐるしくかつ大きく変化しています。特に、人口減少と高齢化、医療費の増大、運動不足による疾病の増大などの社会状況の変化は、大きな社会問題を招いています。この影響を受け政治、行財政、経済構造など社会のさまざまな分野において従来のシステムの改革が推し進められています。

一方、20 世紀以降国際的に急速に普及･発展し、とりわけ 1964 年のオリンピック東京大会開催を契機に創造的な文化活動の重要な柱として国民の中に広がっていったスポーツは、その存在感をさらに強めています。スポーツがこれほどに注目されている時代はこれまでなかったように思います。

また近年では、競争性を可能な限り排除し誰でも楽しむことができるようにルールが改良された軽スポーツ、ゆるスポーツや近代科学の技術革新の恩恵を受け誕生したニュースポーツ、超人スポーツ、e スポーツと呼ばれるスポーツが多くの人々を虜にしています。

また健康を意識して、ヨガや太極拳、体操やダンス、エアロビクスなどを行ったり、自然への回帰を求めてウォーキングや･ハイキング、山登りに出かけたりなど、スポーツはこれまでになく多様化しています。



政策対象としてのスポーツ

このようなスポーツの多様化は、スポーツが健康・社会福祉、教育・社会化、経済発展等社会の広範な領域への貢献が期待されている現れであるといえます。

したがってわが国のスポーツは、文教政策の一分野としてのみ捉えるのではなく、健康福祉政策、地域づくり政策、観光政策、さらには経済政策の一貫として広く対応することが必要であるといえます。

これまで、国会及び都道府県議会においてスポーツがどのように捉えられ、議論が展開されてきたのか、またその議論がどのように政策に結実しているかについて国会議録の分析から考察を行ってきました。

現在は、これまで実施してきたスポーツに関する議論の分析をさらに進め、わが国のスポーツ政策が策定されるに至るまでの過程を明確にすることを目指しています。

大学時代は、様々な経験を積んで視野を広げましょう

観光による地域経済活性化に向けて

私は、大学教員になる前は観光関連のシンクタンクに 11 年間在籍していました。当時、観光客の満足度に関する調査業務に携わったことをきっかけに、観光マーケティング領域の学術研究を行うようになり、博士論文では観光地における観光客の維持（リピーター化）について取り組みました。その当時から、「観光による地域経済化を果たすためにはどうすればよいか」という問題意識を持ち続けながら研究を進めています。

地域産品ブランドと観光地ブランドの相乗効果を考える

近年は、地域産品ブランドと観光地ブランドの相乗効果を創出するためのメカニズムの解明に取り組んでいます。地域の中には、様々な地域産品ブランド（主に地名がブランドネームとして付与された食料品、工芸品など）があります。こうした地域産品ブランドの評価が消費者の中で高まると、地域産品ブランドの本場に観光したいという人が出てきます。一方で、ある観光地のことをすごく気に入っている消費者は、その地域のことを支援するために、地域産品ブランドを購入する可能性があります。私は、こうした地域産品ブランドと観光地ブランドの相乗効果が創出されるためには何が必要なのかについて、消費者の態度や行動を分析するアプローチを用いて研究しています。

その他の研究テーマ

最近は、観光地マーケティングの新たなアンケート調査手法に関する研究や、観光マーケティングの歴史的な側面に着目した研究も進めています。

外山 昌樹
研究室

専門分野

観光マーケティング、
消費者行動

担当科目

観光経営論、観光経済論、
観光マーケティング論、
基礎演習、演習

ゼミの活動内容

私のゼミでは、観光マーケティングを研究対象とします。観光マーケティングというと、ホテルや旅行会社といった個別企業のマーケティングをイメージする方が多いと思いますが、そうした個別企業に加えて、観光地のマーケティングについても学びます。具体的な活動としては、文献購読、現地視察、グループワークを通じて、観光を専門的に見る能力の向上を図っていきます。

私のゼミでは、大学のゼミでの経験を、社会人になって仕事をする際にも必要となる各種能力の向上につなげたいと思っています。具体的には、情報検索能力、文献読解能力、調査能力、プレゼンテーション能力などが対象になります。学生の皆さんが主体的にゼミ活動に関わることで、社会に出てから活躍できるようになる環境を整備していきたいです。

花井 友美 研究室

専門分野

観光心理学、
旅行者の意識と行動

担当科目

観光計画論、地域統計論、
旅行者行動論

ゼミの活動内容

何かに対して特別な関心や興味を持ち、とことんこだわって考え行動する―この過程で自分が本当に大切にしたいことや、どのように成長したいかが自然と見えてくるでしょう。このことは学生時代に限りませんが、好きなことに熱中できる時間が多いのはやはり学生時代だと思います。好きなことに熱中している時間は非常に楽しく、その過程で得られる達成感や充実感は、学びや仕事に対する意欲を高めてくれます。旅行も同じで、その体験に心から熱中することで、その土地の文化や歴史を深く知り、心に残る特別な思い出を作ることができます。皆さん、自分の好きなことを大切にし、そこから得られる価値を深く味わってください。

好きなことに“こだわって”ください！

観光心理学とは？

私の専門は観光心理学です。これは旅行者の行動や心理を解明する学問です。例えばなぜ人は旅をするのでしょうか?このシンプルな疑問に対する答えは一つではなく、人によって異なります。ある人は未知の体験を求め、また別の人は癒しやリラックスを目的に旅に出ます。旅行の魅力や旅を通じて感じること、得られる価値は人それぞれです。また、観光心理学は、観光地のデザインやマーケティングにも応用が可能です。旅行者がどのように魅力を感じるかを理解することは、より質の高い観光体験を提供する手がかりとなります。旅を楽しむだけでなく、その背後にある人間の心のメカニズムを探る、非常に興味深い学問です。

バーチャルな旅での刺激の感じ方

私が最近興味を持っている研究テーマを二つ紹介します。一つ目は、バーチャルな旅です。インターネットやVR技術を活用したバーチャルな旅は、移動が困難な人々に新たな旅行手段を提供するだけでなく、オーバーツーリズムや環境負荷の軽減に役立つ可能性があります。しかし、バーチャルな旅は実際の旅行と比較して五感をすべては使えないため、没入感が欠けるという指摘もあります。没入感には、技術的な要因に加えて、個人差が影響します。同じデバイスを使って同じコンテンツの旅を経験しても、全く集中できなかったという人もいれば、エンジョイできたという人もいます。この違いが生まれる理由の一つが刺激に対する感受性の個人差です。旅行中の出来事（外部刺激）や旅行者自身の心理的・生理的変化（内部刺激）にどのくらい敏感であるかによって、没入感が変わってくる可能性があります。この刺激の感じ方がバーチャルな旅での没入感にどのように影響するかを研究しています。

教育旅行の効果

もう一つの研究テーマは教育旅行の効果です。教育旅行は、学習を主目的とする場合と、余暇活動に教育的要素が加わる場合があります。日本では修学旅行がその代表的な例です。修学旅行によって生徒は異文化や国際理解に対する肯定的な変化を経験し、外国の人々や文化に対する好意的なイメージが形成されることがあります。また、修学旅行後に生徒のウェルビーイングが向上するという報告もあり、自己肯定感や社会的なスキルの発展に寄与することが期待されます。また、修学旅行では、事前学習が重要な役割を果たします。多くの学校では、旅行前に「旅のしおり」を作成したり、班ごとに自由行動の計画を立てたりすることが一般的です。この事前学習が旅行中の体験と密接に結びついていると、修学旅行自体の満足度が高まり、中長期的な教育効果も期待できます。

「社会を映す鏡」として考えてみよう

エスニックマイノリティと観光

私は大学院時代からエスニックマイノリティ（少数民族）の方々と観光の関係性に関する研究を行ってきました。グローバリズムのなかで、少数民族の方たちの固有文化、帰属意識、民族意識がどう変わっていくのか、それに観光はどのような役割を果たすのかについて興味を持っています。

外国人街の観光地化について

本学に赴任してからは、ブラジル人街や韓国人街を例として、外国人街の観光地化に関する住民の意識に関する研究を行いました。地域政策の観点から観光地化をとらえ、観光地化がどのように日本人住民と外国人住民の間の相互理解や外国人住民のエンパワーメントといった地域的課題を解決することに役立つかを調べてきました。研究を通して、同じ地域の中でも観光地化に関する考えは社会的立場によって大きく違うことが明らかになりました。地域住民を考えるとき、それが一つのグループではなく様々な考えを持った人たちの集合体であることを理解する必要があると思っています。また近年の外国人住民の増加により、「外国人街」と呼ばれる地域も、複数の民族グループから成り立つ場所が増えています。従来とは違う形での異文化共存や観光促進が必要なのかを探っていきたいと考えています。

コロナ禍後の観光

最近は、コロナ禍後の観光の在り方に興味を持っています。コロナ禍において観光をする人と控える人がいて、社会が分断したかのように見えましたが、今は何事もなかったかのように観光活動がさかんになっています。ただ、なぜ分断が起きたのか、その分断がどのようになくなっていったのか、振り返って検証することで今後起こりうる観光地での災害やその後の観光のあり方に生かせたらと思います。また、各地でオーバーツーリズムが問題になっています。本来、異文化理解の一端を担うべき観光活動ですが、今の状況がどのように海外からの観光者と地域の人たちの間の関係に影響を与えるのかを探っていきたいと思います。

丸山 奈穂
研究室

専門分野

観光学、地域住民と観光、エスニックマイノリティと観光、観光と異文化交流

担当科目

国際観光論、観光プロモーション論、観光文化政策論、演習 I、II、基礎ゼミ

ゼミの活動内容

丸山ゼミでは、主に観光と文化、そしてそれにまつわる観光政策について学びます。ある地域の文化を観光化するとき、どういうプロセスを経ていくのか、地域政策とはどのようにかかわっているのか、観光化は地元住民や文化へどのような影響を与えるのか、といったことを考えます。また、観光が与える影響というのは、観光者にどのような影響を与えるのでしょうか。本ゼミでは、「観光」という人が楽しむために行う行動が人々に与える影響を分析することによって、地域づくりのなかで観光をどのように生かしてくかを考えていきます。またディスカッション、プレゼンテーション、グループ研究などそれぞれが課題に主体的に取り組むことを目標としています。

八木橋 慶一 研究室

専門分野

社会起業論、
ローカル・ガバナンス論

担当科目

社会起業論、NPO 論、
コミュニティビジネス論、
基礎演習、演習Ⅰ・Ⅱ

ゼミの活動内容

ゼミでは、社会起業（ソーシャルビジネスとも言います）関連のキストを輪読します。同時に、これらに該当する団体（たとえばNPO 法人）を訪問して調査を行います。2・3 年次はこのような地道な作業を通じて卒業論文のテーマを決め、4 年次には論文作成に取り組むことになります。また実践的な活動として、高崎市の榛名神社の社家町地区で地域活性化のボランティア活動も行っています。地域のイベントのお手伝いや神社のボランティアガイドなど、地元の方と協力しながら活動しています。楽しく、でも適度に厳しく勉強するのがこのゼミのモットーです。2 年半のゼミはあっという間です。充実したものになるよう目的を持って主体的に動いてください。

目的を持って学生生活を過ごしてください。

2 つの「シュウカツ」

人生の中で重要な行動は、人によってさまざまかもしれません。保護者から経済的に自立するために行う「就活（就職活動）」は、人生の前半で重要な行動のひとつであると思います。また、2010 年代から広がり始めた、自分らしい人生の終わり方を考え、実践する活動、いわゆる「終活」は、人生の後半での大切な行動のひとつになりつつあります。

しかし、だれもが満足できる 2 つの「シュウカツ」を行えるわけではありません。不登校やひきこもりになった若者は、そもそも普通の就活ができません。そこで、行政や民間非営利団体（NPO 法人など）が社会復帰と就職の支援を行うことがあります。また、身寄りがなく生活に困窮している人は、終活を十分に行うことができません。このような場合、葬式やお墓についての本人の希望がだれにも伝わらず、故人の遺志が無視されます。一部の地方自治体では、民間団体と協力しながら、この問題に取り組み始めています。この 2 つ「シュウカツ」で民間団体と行政に何ができるのか、どんな協力関係が望ましいか、といったことを研究しています。

人とのつながりを大切にした経済活動は成り立つ？

もうひとつの研究テーマは、より大きなものです。現在、わたしたちはグローバルな市場経済の中で生活しています。厳しい競争を勝ち抜き、自己責任で生きていく、そういった生き方が求められています。とはいえ、他人を尊重し、つながりを保った経済活動を行うことは本当に不可能なのか。疑問が浮かびます。

答えは簡単にはでません。ただ、21 世紀に入ってから、社会貢献活動とビジネスの両立を強調する「社会的企業」という組織が登場しました。簡単に言えば、上述の民間非営利団体、あるいは協同組合といった既存の団体が、リニューアルしたものです。彼らによる経済活動や運動の総称を、「社会的連帯経済」と呼んだりもします。この経済のかたちにどんな可能性があるのか、また限界はどこにあるのか。そのような点に関心を寄せて研究をしています。

観光の歴史と文学的想像力が、私たちを形作る

観光史から、地域社会の人々の「思い」を考える

観光地や観光活動のなかで展開される文化や伝統は、一見すると過去から形を変えずに綿々と受け継がれてきたものとして、本質的に捉えがちです。そして、観光の現場でも同様に、文化や伝統の持つ歴史的古さや普遍性といった「ルーツ（起源）」を強調し、地域の独自性や固有性を美徳として語っていきます。しかし、観光史を調べていくと、一連の文化や伝統が実は、観光という「舞台」のなかで選び取られたひとつの「台本」でしかないことに気づくはずです。むしろ、文化や伝統をめぐるゲスト（観光者）、ホスト（観光地）、プロデューサー（観光産業）の間での相互交渉によって蓄積されてきた「ルート（歴史）」と、その背後に存在する、人びとや社会の多くの「思い」が存在することを知ることになります。

私自身、中東・イスラーム社会や日本国内の宗教観光や観光文学を分析するなかで、紆余曲折しながら発展してきた観光現象の背後にある、人びとの多様な思いに触れてきました。中東から始まり、南アジアや東南アジア、西洋諸国や日本各地の観光地をめぐるなかで、観光に仮託される人びとの思いや歴史の重さを、常に感じています。

人生哲学としてのツーリズム・リテラシー

研究を進めていくと、観光とは決して「一時的な非日常」ではなく、私たちの日常生活や人生とコインの表裏のように、密接に関わりを持つ実践であることに気づかされます。そのなかでも、口頭や文字、写真で「観光経験を語る」という行為が、時代や地域固有の社会的文脈を生み出す実践であることを、「よりよい観光を実践するための技法や思考」としての「ツーリズム・リテラシー」の概念を絡ませながら明らかにしようとしています。近年では、過去から現代にいたるまで、中東諸国をはじめとする世界各地を旅した旅行者たちの旅行記や、SNS、Vlog といったデジタル空間上のコンテンツ、文学作品を分析しながら、その歴史的変遷を追っています。

以上のように、観光史を分析することは、過去を解明するだけでなく、現代社会における豊かな観光文化としての「ツーリズム・リテラシー」を創造する原動力ともなるはずです。観光の持つこの無限の可能性に惹きつけられ、私は今日も研究を続けているのかもしれません。

安田 慎
研究室

専門分野

中東地域研究、イスラーム地域研究、観光史、観光政策

担当科目

学　部：観光学概論、
観光政策論、
基礎演習、演習Ⅰ、演習Ⅱ
大学院：観光政策特論、
観光政策特論演習

ゼミの活動内容

「観光史から地域・社会のツーリズム・リテラシーを読み解く」というテーマでゼミナールを運営しています。私たちが経験する観光体験は、地域・社会のなかに埋め込まれた観光実践のイメージ群を反映して常に生成され続けています。地域・社会の観光史を学ぶなかで、個人や社会の「よりよい観光の実践するための技法や思考」としての「ツーリズム・リテラシー」の内実を明らかにしていきます。

ゼミでは、国内外の観光地・観光現象を対象に、各地の図書館での文献資料収集における旅行記やガイドブック、旅行雑誌、ポスター、写真といった観光資料の収集・分析や、フィールドワークを通じた参与観察やインタビュー調査を行っていきます。

渡部 瑞希 研究室

専門分野

文化人類学、経済人類学、観光人類学

担当科目

文化人類学、アジアの観光と文化 他

ゼミの活動内容

百聞は一見に如かず。座学も大事だが、実際に現場に赴き自分の目で観て聴いて学修するフィールドワーク（FW）も同様に大事である。しかし、FWはただ現場に行けば簡単にできるものでもない。FWには様々な種類があり、FWの技法（観察法やインタビュー方法）も数多くある。FWのための倫理やリスクも事前に学修する必要があるだろう。また、FWは単に自己満足で終わらせるだけではもったいない。現場の状況を社会に還元できる有益な情報として他者にわかりやすく説明することも、フィールドワーカーの務めである。

本ゼミでは、FWの技法を学修した上で、それらを実際の現地調査で実践し、まとめる作業を行う。なお、FWはゼミ生全員で実践する場合もあるが、ゼミ生それぞれの疑問や関心に沿って、観光･医療･地域社会･NGO･アルバイト先等、自由に実践することもできる。

学生時代にこそできる「知の追求」をしよう

異質な他者から「人間に共通する何か」を見つける

文化人類学とは世界のさまざまな文化や慣習について、長期のフィールドワークによって明らかにする学問である。そのため文化人類学者は様々な国に長期滞在するが、私の調査対象地はネパールの首都、カトマンズの観光市場タメル地区である。

現在、私は、タメル地区で代講（daigou）と呼ばれる転売ビジネスに従事しながら旅を楽しむ中国人観光客について調査をしている。代講者とは、海外旅行先で WeChat や Weibo などの SNS や、淘宝網や Tmall などの電子商取引プラットフォーム、直播（Zhíbò）と呼ばれるライブ配信を活用しながら、中国本土に居住する顧客の代わりに観光商品を購入する人びとである。つまり彼らは、海外旅行の資金を旅先で稼ぎながら旅を続ける人びとなのだ。

通常、旅や観光は余暇･消費活動だととらえられる。そのため、観光しながら商売をする代講者は我々にとって理解しがたい異質な存在に映る。しかし、そうした異質な他者と我々の間に「人間に共通する何か」を探し当てるのが文化人類学の醍醐味である。私は代講者の活動の中から我々にも共感しうる「人間らしい働き方」を探っている。

文化人類学から「生き方の哲学」を学ぶ

代講者の多くは、観光地で「自分らしく自由に、リラックスして仕事をする」ことをモットーにしている。それは、観光（余暇や遊び、非日常）と仕事を融合させた新たな生き方である。一方、仕事や勉強を一生懸命やることを美徳とする日本では､過労死やストレス､ブラック企業の問題も起きている。日本の「働き方改革」に見られるように、現在、日本の仕事観は変更を迫られている。こうした日本の現状に直面して思い起こすのは、仕事に旅感覚（遊び、非日常性、楽しみ）を持ち込み、自分らしく自由に働く代講者の生き方である。つまり、遠い存在である代講者の生き方や仕事観から、日本に足りない思考や文化を取り込むことで、異文化の垣根を越えた「人間らしい働き方」が発見できるかもしれないのだ。

しかし、それだけで終わらせるのはもったいない。「人間らしい働き方」を発見するなら、それを「生き方の哲学」として自身の人生に投影する方がよい。文化人類学は、我々の生活には無縁に思える遠い国の文化や社会から、我々にとってよりよい生き方を模索し実践していくための知恵を提供する学問でもある。それを研究することは、我々自身の「生き方の哲学」を作り上げることにつながるのだ。